

第2章



「食」をきっかけに集う

「盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ
『触×食』のワークショップ」

(1)背景・目的

昨年度は、近江八幡市にある美術館、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(以下、NO-MA)において、盲ろうの人、また盲ろうの人と一緒に楽しみたい人が集う芸術鑑賞会を実施しました。この鑑賞会で取り組んだ工夫や合理的配慮について、芸術鑑賞以外の場面においてもその実効性を検証するため、「食」をテーマとしたワークショップを開催しました。地元の伝統食材に触れたり、生産者から話を聞いた後に、その食材も使われたランチを楽しむというこのワークショップは、滋賀県長浜市にある「LOCO Kitchen」で実施しました。LOCO Kitchenを運営している子育て応援カフェLOCOの代表宮本麻里さんは、ウェブサイト「SHIGA-FUKU」のインタビュー(※P14掲載)にも協力いただいています。LOCO Kitchenは当初、親子

カフェとしてオープンしましたが、現在は、子育て世代だけではなく、シニア世代や高校生の居場所としても展開されていて、「誰にとっても安心できる場」を掲げています。

(2)方法

「盲ろうの人、視覚障害の人と楽しむ『触×食』のワークショップ」を実施し、参加者のアンケートからアクセシビリティにかかる成果と課題を考察しました。

○ワークショップの概要

日時:9月15日(火)

【一部】10:00~12:00 参加者10人
(うち盲ろう者2人、視覚障害者1人)

【二部】12:30~14:30 参加者7人



LOCO Kitchen

(うち盲ろう者2人)

会場:LOCO Kitchen

対象:盲ろう者、視覚障害者、一緒に楽しみたい人

主催:社会福祉法人グロー(GLOW)

共催:子育て応援カフェLOCO

協力:えきまち長浜株式会社、NPO法人しが盲ろう者友の会、滋賀県立視覚障害者センター、長浜バイオインキュベーションセンター、本田靖子(高月丸ナス生産者)、山岡絹代(尾上菜生産者)、涌井洋子(尾上菜生産者)

○ワークショップの特徴

・体感型のワークショップ

長浜の伝統野菜(尾上菜、高月丸ナス)に触れ、触覚や嗅覚で野菜本来の触感や香りを感じ、その野菜を使ったランチを味わうワークショップ。

・ランチの点字メニュー

点字を使う視覚障害の人へは、LOCO Kitchenの点字メニューを配布。点字を使わない人(支援者)も、本人がどこを読んでいるのかわかるよう墨字の上に点字シールを貼りました。

・JR長浜駅から会場までの案内

視覚障害の人からのヒアリングで、「電車の乗り降りについては駅員が誘導してくれるので単独でも移動することは可能だが、駅から初めての場所に移る移動するのは単独では難しい」との意見がありました。LOCO Kitchenは、JR長浜駅直結徒歩1分であり、視覚障害の人が単独でも参加しやすくなるよう駅から会場への案内を行うこととしましたが、今回のワークショップでは、単独で参加される方はいなかったため、希望者はいませんでした。



点字メニュー

•一緒に楽しみたい人も参加
ワークショップでの共通体験から相互理解
をもたらすと考え、障害当事者だけでなく、
一緒に楽しみたい人も参加対象としました。

○当日の流れ

はじめに、視覚障害の人が、会場の様子を
イメージできるよう会場の広さ、トイレや厨
房などの位置関係、どのような人が何人参加
しているのかを説明しました。そして、料理
を待つ間に長浜の伝統野菜(尾上菜、高月丸
ナス)に触れ、触覚や嗅覚で野菜本来の触感
や香りを感じ、その野菜を使ったランチを味
わいました。目が見える人は、視覚ではなく、
触覚と嗅覚で感じることを重視したため、野
菜に触れる際は、アイマスクをつけてもらい
ました。そして、野菜の生産者に野菜の特徴
や栽培方法などを説明していただき、食事が
終わったところで参加者がそれぞれ感想を
発表しました。

(3)アンケート結果

アンケート回答者:16人(うち盲ろう者4人、視覚障害者1人)

質問1:このワークショップに参加しようと思われたきっかけは何ですか？
(複数回答可)

- ①ワークショップのプログラムに興味をもった……7(1)
- ②野菜(長浜の伝統野菜)に興味があった……7(2)
- ③LOCO Kitchenのランチを食べたかった……1(1)
- ④他の参加者と交流したかった……4(1)
- ⑤知人に誘われた……1(1)
- ⑥参加するように勧められた……5(3)
- ⑦盲ろう、視覚障害に関心があった……3(0)

※()内は障害当事者の回答数

「ワークショップのプログラムに興味を持った」「野菜(長浜の伝統野菜)に興味
があった」と答えた人が全体で最も多く、障害当事者の回答では「参加する
ように勧められた」が最も多い回答となりました。

質問2:ワークショップについてお聞きます

	よい	まあまあ よい	ふつう	あまり よくない	よくない	無回答
ワークショップの進行	7(2)	6(2)	3(1)	0	0	0
参加者との交流	3(0)	4(0)	6(3)	1(1)	0	2(1)
点字メニュー	3(1)	1(0)	3(0)	2(1)	0	7(3)
会場への行きやすさ	13(4)	1(0)	1(0)	1(1)	0	0

※()内は障害当事者の回答数

「会場への行きやすさ」がよいと評価した人は全体で13名おり、障害当事者は
5名中4名がよいと評価しました。障害当事者の回答では、「参加者との交流」
「点字メニュー」は比較的评价が低いという結果になりました。

質問3：ワークショップで良かったことはありましたか？（複数回答可）

実際の野菜に触れる	特別ランチが食べられた	意見交換ができた	いつもと違う場所や空間に来られた	安心して外出ができた	特にない
14(3)	10(4)	2(0)	6(2)	5(4)	0

※（ ）内は障害当事者の回答数

全体では、「実際の野菜に触れる」「特別ランチが食べられた」を選んだ人が多かった。障害当事者の回答では、「特別ランチが食べられた」「安心して外出できた」を選んだ人は5名中4名でした。「意見交換ができた」と回答した人は16名中2名でほとんどいませんでした。

質問4：催し物に参加する上で、どのようなことに重点をおきますか？
（特にそう思うもの3つ回答）

障害について理解がある人がいる	他の参加者と交流ができる	点字や音声ガイドで情報を得ることができる	芸術作品等を制作できるメニューがある	触ったり、香りや味を楽しめる体感型のメニューがある
4(2)	6(1)	2(1)	2(1)	14(4)

ウェブなどで事前に情報が得やすい	会場のバリアフリー設備が整っている	会場のトイレの場所がわかりやすい	会場への交通の便が良い	無回答
0	7(2)	0	8(1)	1(1)

※（ ）内は障害当事者の回答数

全体で最も多かった回答は、「触ったり、香りや味を楽しめる体感型のメニューがある」でした。「ウェブなどで事前に情報が得やすい」「会場のトイレの場所がわかりやすい」と回答した人はいませんでした。



『触×食』のワークショップの様子

ご意見・感想

- ・普段味わえないことが体験できた。お料理は美味しかったです。（盲ろう者）
- ・クリスマス会をしたい。（盲ろう者）
- ・ツルツルの点字メニューは、指がすべりにくく読みづらい。（視覚障害者）
- ・楽しんで参加ができ、また盲ろう者の方も楽しんでくださり良かった。（通訳介助者）
- ・詳細なプログラム企画に大変ご苦労いただいたと思います。（通訳介助者）
- ・LOCOさんの心のこもった特別メニューは温もりのワークショップを演出していただきました。（通訳介助者）
- ・参加して楽しかった。（その他の参加者）
- ・私は、目での情報で、その後香り、食感でしたが、アイマスクをすることで触ってからでしたので子供たちもこのように食事をしているのかと改めて感じました。（盲ろう者の家族）
- ・以前、彦根の視覚障害者センターで音読講座を受講したことがあり、今後時間をみつけて手助けができたと思っています。（その他の参加者）
- ・参加者との交流は、現状では自己紹介をすることくらいしかできないのが残念。コロナがなければ良かったのに！アイマスクをして「お野菜を触る」のは良いと思った。（その他の参加者）

(4) 考察

盲ろうの人は普段から外食する機会が少なくと推察されます。ワークショップで良かったことについて「安心して外食できた」という回答が障害当事者の回答の中で最も多かったことは、外食したいというニーズがあることを示していると言えます。また、イベントを通してお店に親しむことや、お店や周囲が盲ろうへの理解を持つことで、障害当事者も安心して外食を楽しむことが示唆されました。

催し物に参加する上で重点をおくことについては、障害当事者、通訳介助者、その他の参加者ともに「見る聞く以外の方法で体感できるプログラムがあること」を重視しているとわかりました。特に盲ろうの人は参加できる場の選択肢が少なく、活動の幅が限られていると言えます。味覚、触覚、嗅覚を使って楽しめるプログラムは、盲ろうの人が活動に参加できるためにも重要です。

参加者からはワークショップの改善点に関する意見も挙げられました。通訳介助者からは、食べながらの通訳が難しかったという感想が多く寄せられました。盲ろうの人も通訳介助者も安心して食事ができるように、食べているときは説明を減らし、通訳を中断しないでいいように工夫する必要があると考えられます。

また、今回のワークショップでは、参加者同士で交流する場面をほとんど設定できず、通訳介助者からは、「関係者だけでなく参加された方と交流できる機会になればいいと思いました」「当事者さんの感想も知りたいです」等の声や、その他の参加者からは「交

流できないのが残念」との感想が寄せられました。交流したいというニーズが一定あることがわかり、今後の課題として感染症対策をしながら、盲ろうの人や視覚障害の人、参加者それぞれが交流できる方法を考え、実践していくことが重要だと推察されます。

今回のワークショップのようなイベントの情報は、直接当事者本人に伝えることは難しいため、通訳介助者に情報を伝えてもらうことになります。直接情報を伝えることができなくても、通訳介助者を通じて障害当事者が情報を得られることで、活動の選択肢が増え、より社会参加しやすい環境を作ることができるのではないかと考えます。

盲ろうの人が社会参加できている状況を示す指標の一つに、障害当事者から「もっとこうしてほしい」との声が上がると思うのですが、まだ十分とは言えません。様々な体験を積み重ねることで、具体的な要求が生まれると推察されます。今後も盲ろうの人とともに楽しめる催し物を継続して開催することで、社会参加の場の充実を図る必要性を実感しました。

一方、今回のワークショップをきっかけに、その後、しが盲ろう者友の会とLOCO Kitchenが協力した活動が生まれたことは、少しのきっかけで障害当事者の活動の幅が広がる可能性を示してくれました。今後も、催し物を通して、障害当事者や支援者と地域の関係性が生まれ、盲ろうの人の活動の幅が広がることも期待して実践を続けようと思います。

